

もろびとよりの日本への旅

人類学者

川田順造

●第一部 ● 江戸東京の下町が「記憶」するもの

これから旅立つ、千住の芭蕉さん

隅田川を遡って千住へ

七十年前、小名木川北岸の私の生家の前に、横付けになった伝馬船から、渡り板をしなければ店の若い人たちが米俵をかついで倉庫へ運び込んでいた、その河岸から、私たちNPO本所深川の一行、赤組青組合わせて六十人は屋形船に乗りこみ、隅田川を遡って千住に向かった。

船旅のあいだ、亀戸の仕出し老舗「升本」の二段重ね「皇月弁当」を賞味し、西に大きく迂回している隅

田川の千住大橋北詰の船着き場から上陸した。

この辺りでは、いくつかの道路が合わさって、千住大橋に向かう車の交通量も多い日光街道を東へ渡ってすぐの足立卸売市場入口の一隅に、江戸時代の北千住「やっちゃ場」(青物をはじめとする卸売市場)の看板行灯を模した、電灯の点る石柱が立っている。正面には「日光道中千住宿」と刻まれ、「みぎ日本橋」「ひだり草加」とあり、その脇の小さな凹みに、美しい白御影石の芭蕉の立像が建てられている「写真1」。像の向かってすぐ左に、「奥の細道、矢立初芭蕉像」と刻んだ石碑がある。



【写真1】千住宿跡の「矢立初芭蕉像」(筆者写す)

私がいま感銘を受けたのは、立ったまま左手に持った料紙に筆を走らせている芭蕉の、これから長途の旅に発とうという気魄が自然にみなぎった姿態と、みずみずしい温顔だ。

例によって宗匠頭巾は被っているものの、萱笠は背に負い、杖は見えない。左足を軽く前に踏み出して、立位のうちにも「動」への契機を籠めている。同じ「奥の細道」への旅立つ芭蕉を表したものでも、採茶庵の縁先に腰をおろして杖をつく、顔に深く皺の刻まれた姿との、何というへだたりか。

芭蕉がかなり若年から宗匠頭巾を愛用したのは、私の推測では、早くから禿頭だったからではないかと思う。芭蕉と親交があった画家 はなせ 英一蝶(承応元年(一六

五二) 享保九年(二七二四)が芭蕉の死後に描いた「芭蕉と柳図」と、生前の芭蕉は知らないが与謝蕪村(享保元年(二七二六) 天明三年(一七八三)の描いた「俳仙群会図」中の芭蕉とは、管見の限りでは、頭巾も笠も被っていない唯二の芭蕉像だが、ほとんど禿頭に描かれている。屋内でも芭蕉が頭巾を愛用した理由の一つも、そこにあつたのかもしれない。

そして、若禿げを気にして頭巾や今なら帽子をかぶればかぶるほど、頭皮が蒸れて血液の循環が悪くなり、ますます禿頭を助長するようだ。職務上、ぴったりした制帽をいつもかぶっている職業の男性に、禿頭が多いというのは、現代では広く知られている事実だ。

旧道を楽しむように

閑話休題。この芭蕉立像と「やつちや場」に敷かれていた御影石の敷石を使ったこの一隅が作られたそもその始まりには、江戸時代から代々千住河原町に住